普及情報

大麦（シュンライ）の産地化を目指して

稲美町は転作作物として麦茶用六条大麦を振興している。品種は時代と共に変わり、1986年まではカシマムギ、1987～94年はリクゼンムギ、1995年からシュンライとなった。面積は1992年から緩やかに増え始め、1995年には約80ha となった。また、収量は1985～94年の10年間の平均収量は281kg/10a であったが、最近では400kg/10a を越えるようになっている。

1 農家をやる気にさせるには

「麦は転作として播けば良い」「麦は条件の悪い所でやれば良い」と言う意識が農家にあった。これでは穫れるわけがない。麦は努力に比例して収量も上がる。これを農家に理解してもらうことは難しい。

稲美町は排水対策が十分でないほ場が多く、各集落で排水溝設置の仕方、弾丸暗きょの必要性を繰り返し説明した。特に弾丸暗きょは「本暗きょがないと効果がない」と考えている農家が多かった。そこで、K集落の本暗きょのない一番排水の悪いほ場で、弾丸暗きょの展示ほを設けた。「この田では麦は穫れない」と言われていた。収量は約250kg/10aと低かったが、全く穫れないと思っていた農家には驚きであった。「この田で穫れるなら、良い田ならもっと穫れるのでは!!」と考えが変わった。

2 技術が上がれば収量も上がる

麦の基本は排水対策で、排水溝や弾丸暗きょの設置である。さらに収量を上げるには個々の努力が必要で、各集落で講習会や機械実演会を開催し、①播種方法の改善（散播→条播）、②播種量の増加（8kg→10kg/10a）、③土づくり（もみがら牛糞堆肥の投入、4t/10a）、④多条播き栽培（条間30cm→20cm）等を指導した。

その結果、600本/㎡以上の有効茎が確保でき、年々収量も品質も向上した。ここ5年間の平均収量は406kg/10a、500kg以上の年もあった。これにより麦は「儲からないもの」から「儲かるもの」となった。

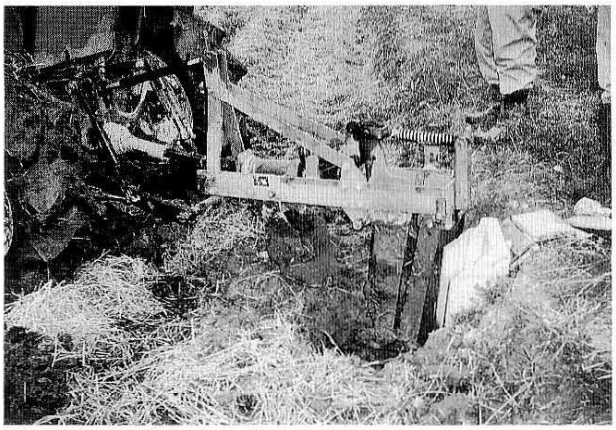
3 関係機関との連携による産地づくり

稲美町では大麦栽培を振興するため、種子無料配布（町、農協共に50%補助）、町単による播種機・サブソイラー・コンバイン等に対する50%補助と土づくり実施営農組合への2,000円/10a 補助を行っている。これらによりスムーズに技術が導入され、収量や品質の向上にも繋がり、栽培面積も着実に増え始めた。大麦は主に営農組合の取り組みであり、緊急対策や経営確立助成も面積拡大の後押しとなった。その結果、2000年の作付面積は200ha を越えた。

4 今後の課題

「大麦は努力すれば儲かるもの」と言う理解が定着しつつある今、収量500kg/10a 以上・面積300ha 以上を目標に振興している。今年から大麦も民間流通になり、付加価値を高める努力も必要となる。

九村　俊幸（加古川普及センター明石支所）



排水口から放射状に弾丸暗きょ設置

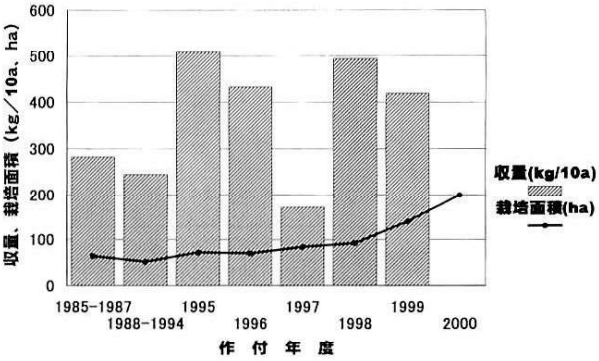


表 稲美町における年度別の大麦収量と面積